「国民想いの消費税」

静岡市立清水小島中学校３年　長谷川　実玖

私はよく、百円ショップに行きます。そのたびに、一つの商品が百円ではなく消費税を含めた百十円であることに、なぜ消費税を払わないといけないのだろうと疑問に思っていました。また、日本の消費税十パーセントは私にとっては負担が大きいと感じていました。そこで、私たちが納めた消費税はどこでどのように使われるのか、調べてみました。

消費税とは、サービスやものを買ったとき、それ自体の値段にプラスして支払う税金のことです。主に国に納められ、私たち国民の生活を支えるために使われます。例えば、高齢者の年金や医療費、子どもの教育や福祉、災害対策や道路整備などです。日本では一九八九年に初めて導入され、その時の税率は三パーセントでした。その後、日本の高齢化が進み、介護や医療など高齢者の社会保障の維持のためにお金が多く必要になったことで、年々消費税率が高くなり、二〇一九年から十パーセントにまで引き上げられました。このことから、私たちは国民全体で社会を支えるために消費税を納めていることがわかり、とても大切なものであると感じました。

日本の消費税について知ることができたところで、日本以外の国の消費税について興味を持ち、調べてみました。世界を見ると日本よりも税率の高い国が多くあり、ハンガリーは最も高い二十七パーセントでした。私は普段、十パーセントの消費税は負担が大きいと考えていましたが、その二倍以上の税率の国があることを知り、とても驚きました。国によって消費税率は異なりますが、使われ方はほとんど変わらず、消費税率が高ければ高いほど、介護、医療などの社会保障制度が充実しています。ハンガリーでは、医療費や大学までの学費が無料だそうです。調べていくうちに、私は「日本とハンガリーはどちらの方が国民想いなのだろう」と考えました。高い消費税を課す代わりに医療費や学費を無料にするハンガリーは、国民の将来を想う優しい国に見えます。一方で、消費税を比較的安くして購入時の負担を小さくしてくれる日本も国民の今の生活を大切にする、国民想いの国だと思います。消費税が高い国も安い国も、それぞれ違うかたちで「国民のため」を想って税率を決めているのだと気づきました。消費税について考えるとき、得か損かよりも、社会を良くしていくためにどうしたらいいかに重点を置くことが大切だと思います。

このように、消費税は「みんなで集めた、お互いを助け合うための貯金」であり、ただ支払うだけでなく将来の私たちのために使われる税金だと言えます。そう考えると、今までは負担が大きいと思っていた十パーセントの消費税が、そこまで負担だと感じられず、国民のために自分の力を使うことができてうれしいと考えるようになりました。これからは、義務としてではなく社会を支える一助として、消費税を納めていきたいです。